

やっぱり助産婦が好き！夢はいつか…

大久保 由賀里

兵庫県加古川市

今、ここに集う

7月号の頼さん、8月号の清洲さん、そして私の3人は、看護学生時代に母性看護に魅かれ、共に助産婦を目指した友達です。

それぞれの現在の所在地からも分かるように、もともと個性豊かな3人だったので進む道も異なりました。いつの間にか頼さんと清洲さんは、違う意味で「先生」と呼ばれる立場になっていました。

以前はよく「3人が同じ職場で働くときっと楽しいだろうね。いつか一諸に働きたいね」などと夢見たりしていましたが、今やもうないだろうと思っていました。ところが今回、こんなかたちで再び3人が集うことになろうとは、嬉しくもあり、また何とも不思議な「縁」を感じています。

一生の宝

私は今、故郷の加古川で市民病院に勤務して4年足らずになります。第二の故郷となった大阪から、生まれてから少女時代を過ごした加古川に10年ぶりに戻って来ました。大阪での10年間は私にとって人生を決定づけた日々でもありました。

父の勧めで大阪の看護学校へ行き、私はその3年間で助産婦への憧れを持つようになりました。事情があって看護婦として1年間大学病院に勤務したあと、自力で助産婦学校へ進学しました。卒業後は大阪府立病院で、素晴らしい先輩助産婦に囲まれ、助産婦の素晴らしさを教えていただきました。そしてこんなにも長く大阪で過ごすことになったのです。

加古川へ戻る際、思い切って約1年あまりの休

息を取ることにしました。思いのままに過ごしたこの期間は、非常に意味深いものになりました。個人病院や助産院の門を叩き、突然研修をお願いしたこともありました。またさまざまな講演会、研修会にも参加し、思春期相談員の資格も取れました。資金稼ぎのアルバイトをし、書物もたくさん読めました。それから少し親孝行もできたように思います。そんな中で数え切れない方々との出会いや再会は、この時にしかできなかったさまざまな経験と共に私の宝となりました。

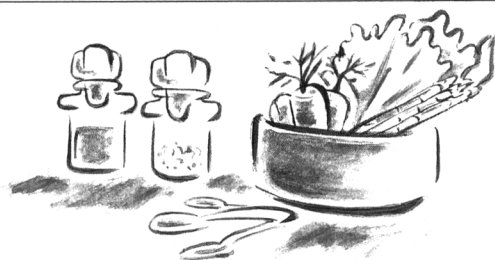
私を必要として下さった方々

今に続く思い出の数々、というより出会いと経験を思い出してみようと思います。

今や3人の母となったTさんとは、長女を妊娠されていたTさんを、助産婦学生だった私が受け持ったのが出会いでした。そして長男、次女の出産のときも、スタッフの方々の協力で、すべて私が分娩介助させていただきました。それから、私自身のアルバムと共に3人の子の成長記のページが今も増え続けています。

府立病院では、ある深夜勤の晩に何と6人もの分娩がありました。その中のひとりだったNさんには、分娩台上がっていたのに、後から来た経産婦さんに追い抜かれ、いったん分娩台を降りてもらうほどの混雑でした。あまりの気の毒さに、勤務を追えた後6人ひとりひとりにあめ玉を差し上げて回りました。今もNさんとは連絡が絶えません。その時に生まれたMちゃんは小児てんかんで通院していますが、今年小学校一年生になりました。

高校の同級生でもあるWさんとは、不妊症の治



療をしていた頃からのかわりですが、無事妊娠し、ご主人立ち会いで涙の出産までこぎつけました。半年が過ぎ、お父さん似の赤ちゃんは母乳っ子で丸々としています。

手指欠損症と合指症、その上心疾患まで合併していたKちゃんを抱いて、夫婦2人で泣き暮らされたMさん。少しお話をしたのがきっかけで、その後たびたび経過を知らせて下さいました。送られてくる写真が、顔だけの写真から全身へと少しずつ変わるのが嬉しく思えました。久しぶりに家族3人でお会いした時、次の妊娠の相談があり、そして今年5月末、長女Aちゃんが生まれました。退院の日、毎日お見舞に来ていたK兄ちゃんが抱っこ真似をしていたのが印象的です。

すでに2人の子の母だった看護婦のKさん。3人目は会陰切開せず納得できる分娩をしてみたいとのことでした。条件が厳しい中で分娩介助をさせていただき、何とか「ノーリス」で出産しました。今では私も一諸に家族旅行などをするのですが、どうやら2歳になったTくんは、自分はまだ6歳のお姉ちゃんと5歳のお兄ちゃんと同じだと思って遊んでいるようです。

産後5日目に会ったTさんは、強烈な乳腺炎で、乳頭の変形が約1年間治癒しませんでした。8か月は完全母乳でしたが、そのつらさに「子供はひとりでもいい!」と涙していました。けれども先月、2人目の子を産む気になったという妊娠の相談に、2歳半のYくんを連れて来院されました。

まだまだ思い出は続きます。たとえ年1回の年賀はがきでも、毎年送って下さる方があります。また、こんな私を求めて連絡を下さったり、会いに来て下さる方がいるのです。これからも数え切

れないほどの出会いのなかで、「今に続く出会い」をしていきたいと思います。

そして私の夢……

私の夢は助産婦として開業することです。ところが、わが愛するこの地域ではいろいろな面でまだまだ問題も多い上、自分自身、助産婦としてもひとりの人間としても問題を抱えているのが現状です。いつ頃夢を実現させるタイミングがつかめるのか、自分でもわかりません。

しかし、恩師でもあり先輩でもあるM先生やI先生、また応援して下さいるO先生やT先生らの言葉を胸に、人生80年の時代に、たとえ半ばを越えようと、必ずタイミングが来ることを信じてその時を待ちたいと思います。そして何より、こんな私を必要として下さる多くの人々がいることをいつも忘れずにいたいと思います。そして、今の状況を少しでもよくしていけるよう、力をつくしたいと考えています。

最後にもう一言。助産婦仲間の皆様、怖がらず助産婦として助産婦らしく生きてみませんか? あなたのまわりをよーく見て下さい! 助産婦としてのあなたを必要とする人が必ずいるはずです。

* * *

さて次は、先日、私の“夢”を輝く目で聞いて下さった、東京の聖母女子短期大学の多賀佳子先生へバトンタッチしたいと思います。先生とはつい最近知り合ったばかりなのですが、とても気持ちよくバトンをお引き受け下さいました。助産婦として心を同じくする先生と、友情の輪を広げられればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。